

科目名	運動学実習				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	PT 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	機能訓練室
授業概要	運動学の知識をもとに実際の身体運動を行うことを通じて、その仕組みについてさらに理解を深めることができる内容を学習する。								
一般目標	運動学的に観察することを通じて、身体運動・動作の特徴やその仕組みを修得する。								
テキスト 参考書等	基礎運動学（医歯薬出版） 観察による歩行分析（医学書院）								

到達目標		
知識（認知領域） ・基本動作・歩行について観察し、説明できる。		
技術（精神運動領域） ・基本動作・歩行について観察し、模倣できる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	下肢ランドマークの触察（加藤）	下肢ランドマークの触察を通じて、骨・筋の特徴について理解し説明できる。
2	下肢の関節運動における二関節筋の影響（加藤）	下肢の関節運動における二関節筋の影響を確認し、その特徴について理解し説明できる。
3	股関節内外旋運動に伴う大転子の移動距離（加藤）	股関節内外旋運動に伴う大転子の移動距離を確認し、その特徴について理解し説明できる。
4	膝関節における終末強制回旋運動（加藤）	膝関節における終末強制回旋運動を確認し、その特徴について理解し説明できる。
5	足アーチの観察（加藤）	足アーチの観察を通じて、その特徴について理解し説明できる。
6	上肢ランドマークの触察（加藤）	上肢ランドマークの触察を通じて、骨・筋の特徴について理解し説明できる。
7	肩甲上腕リズムの計測（加藤）	肩甲上腕リズムを計測し、その特徴について理解し説明できる。
8	肩関節内旋角度の計測（加藤）	肩関節内旋角度を計測し、その特徴について理解し説明できる。
9	手関節肢位の変化による握力発揮の違い（加藤）	手関節肢位の変化による握力発揮の違いを確認し、その特徴について理解し説明できる。
10	テノデーシスアクションによる手指関節角度の変化（加藤）	テノデーシスアクションによる手指関節角度の変化を通じて、その特徴について理解し説明できる。
11	体幹ランドマークの触察 脊柱体幹の関節運動（加藤）	体幹ランドマークの触察を通じて、骨・筋の特徴について理解し説明できる。 脊柱体幹の関節運動を確認し、その特徴について理解し説明できる。
12	呼吸運動①（濱本）	呼吸に関わる筋・関節および呼吸運動を確認し、その特徴について理解し説明できる。
13	呼吸運動②（濱本）	呼吸に関わる筋・関節および呼吸運動を確認し、その特徴について理解し説明できる。
14	正常歩行における下肢と体幹の役割①（加藤）	正常歩行における下肢と体幹の役割を確認し、その特徴について理解し説明できる。
15	正常歩行における下肢と体幹の役割②（加藤）	正常歩行における下肢と体幹の役割を確認し、その特徴について理解し説明できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト	○			評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート	○			評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品		○		評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	加藤 善範、濱本 尊博		実務経験紹介	理学療法業務の中で、運動学に基づいた歩行観察の経験あり。	

科目名	理学療法評価法C				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学年	PT 2年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・治療室
授業概要	理学療法評価は対象者の状態を把握し理学療法プログラムを立案するために必要不可欠である。本授業では、理学療法評価のうち、感覚、反射、筋緊張、痛みの各検査についてその基本的知識・技術を学習する。								
一般目標	・感覚、反射、筋緊張、痛みの各検査について、その目的や内容に関する知識を修得する。 ・感覚、反射、筋緊張、痛みの各検査について、基本的技術を修得する。								
テキスト 参考書等	神経診察クロースアップ（メジカルビュー社） 打鍵器								

到達目標		
知識（認知領域） ・感覚・反射・筋緊張・痛みの各検査について、その目的や内容について説明できる。		
技術（精神運動領域） ・模擬患者（学生）を対象に上記検査を正確かつ迅速に実施できる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	感覚検査①	・感覚の概念が説明できる。 ・体性感覚を3つに分類し、それぞれに含まれる感覚について具体的に説明できる。 ・障害レベルの違いによる感覚障害の分布パターンについて説明できる。
2	感覚検査②	・手順書に従って、模擬患者（学生）に対する触覚検査が実施できる。 ・手順書に従って、模擬患者（学生）に対する痛覚検査が実施できる。
3	感覚検査③	・深部感覚の概念（伝導路を含む）について説明ができる。 ・腱反射の生理学的メカニズムについてできる。
4	感覚検査④	・手順書に従って、模擬患者（学生）に対する振動覚検査が実施できる。 ・手順書に従って、模擬患者（学生）に対する2点識別覚検査が実施できる。
5	感覚検査⑤	・手順書に従って、模擬患者（学生）に対する関節覚検査が実施できる。
6	反射検査①	・反射の概念、腱反射異常のメカニズムが説明できる。反射を3つに分類し、それぞれの代表例を列挙できる。 ・打鍵器を適切に使用できる。
7	反射検査②	・腱反射・表在反射を形成する反射路（求心路、遠心路）・反射中枢を述べることができる。 ・各種反射の実施手順が説明できる。
8	反射検査③	・健常者を対象に腱反射が適切に実施できる。
9	反射検査④	・健常者を対象に病的反射・表在反射が適切に実施できる。
10	筋緊張検査①	・正常筋緊張と異常筋緊張の生理学的メカニズムが説明できる。 ・模擬患者（学生）に対する被動試験を正確に実施できる。
11	筋緊張検査②	・アシュワース・スケール（尺度）変法（MAS）の各グレードを述べるができる。 ・筋緊張異常でみられる異常運動について説明できる。
12	痛みの検査①	・授業内で視聴する痛み動画のポイントを列挙できる。 ・自身の痛み体験を言葉で説明できる。 ・痛みの3つの側面を列挙できる。
13	痛みの検査②	・痛みの定義（IASP）を説明することができる。 ・各種痛み評価スケールの目的・使用方法が説明でき、健常者を対象に痛み評価を模擬的に実施できる。
14	痛みの検査③	・模擬患者（学生）に対して疼痛検査を的確に行うことができる。
15	総合演習	・まとめ課題に対し、適切な解答を提示できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○	○		100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80点以上
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70点以上
授業態度				評価なし	可（1）：60点以上
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	山本 悟		実務経験紹介	理学療法士として約30年間医療施設に勤務し、患者に対する理学療法評価を実施。	

科目名	理学療法評価法D					単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 2年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・治療室	
授業概要	理学療法士が実施する種々の検査測定技法のうち、中枢神経疾患領域における理学療法検査・測定方法を修得する。また、得られた結果の解釈について学び、目標設定や理学療法プログラムの立案につながる臨床推論の基本的な流れが展開できる素地を養う。									
一般目標	・各評価の意義や目的、検査の実施方法を説明できる。 ・検査結果を解釈し、理学療法実施に関わる情報の整理ができる。									
テキスト 参考書等	テキスト:理学療法検査・測定ガイド第2版(文光堂),脳画像の新しい勉強本(三輪書店) 参考書:病気がみえる 脳・神経(medic media),片麻痺機能検査・協調性検査(三輪書店),脳卒中理学療法の理論と技術第3版(メジカルビュー社)									

到達目標		
知識(認知領域) ・脳画像から部位や脳内ネットワークを説明できる。 ・中枢神経疾患における理学療法評価法の方法や判定基準を説明できる。 ・中枢神経障害の病巣や症状を説明できる。 ・評価結果の解釈を説明できる。 ・脳画像所見から考えられる症状を列挙し、予後予測を説明することができる。		
技術(精神運動領域) ・脳画像から目的とする部位や各種脳内ネットワークを特定することができる。 ・中枢神経疾患における理学療法評価法を実施できる。 ・症例に応じて必要な評価項目を列挙できる。 ・評価の結果を解釈し、情報を整理できる。		
態度(情意領域) ・授業に出席する。 ・授業内容に積極的に参加できる。		
回数	授業内容	授業目標
1	脳画像の基礎① 脳の中心部構造	・脳の解剖部位の名称・形状・位置関係を説明できる。 ・脳の中心部構造や大脳基底核の構成体を説明できる。
2	脳画像の基礎② 部位の特定	・脳画像に用いるCT, MRIの特徴を説明できる。 ・脳画像から部位を説明できる。 ・MRAより脳動脈の名称・走行・灌流領域を説明できる。
3	脳画像の基礎③ 錐体路の特定	・錐体路を説明できる。 ・脳画像から中心前回・内包後脚・中脳大脳脚・延髄錐体を特定できる。
4	片麻痺機能検査① Brunnstrom recovery stage	・共同運動、連合反応を説明できる。 ・Brunnstrom recovery stageの検査方法や判定基準を説明できる。 ・Brunnstrom recovery stageを実施できる。
5	片麻痺機能検査② SIAS	・SIASの特徴を説明できる。 ・SIASの項目毎の検査方法や判定基準を説明できる。 ・SIASを実施できる。
6	片麻痺機能検査③ 演習	・Brunnstrom recovery stageを実施し、判定することができる。 ・SIASを実施し、判定することができる。
7	小脳と運動調節系	・小脳内部の機能解剖を説明できる。 ・小脳の連絡線維や小脳系以外の運動調節系を説明できる。
8	運動失調、協調性検査	・運動失調の分類を説明できる。 ・協調性検査の検査方法や判定基準を説明できる。 ・協調性検査を実施できる。
9	姿勢反射	・姿勢反射の反射弓や反射階層理論を説明できる。 ・脊髄・橋・延髄・中脳・大脳皮質の各レベルにおける姿勢反射を説明できる。 ・傾斜反応・保護伸展反応・踏み直り反応・跳び直り反応などの外乱負荷応答を評価できる。
10	バランス検査	・ファンクショナルリーチ, Berg Balance Scale, TUGなどの機能的バランス検査における検査方法や判定基準を説明できる。 ・ファンクショナルリーチ, Berg Balance Scale, TUGなどの機能的バランス検査を実施できる。
11	言語機能の脳内ネットワーク	・脳画像からBroca野, Wernicke野, 弓状束, 縁上回, 角回を特定できる。 ・言語機能における情報処理のネットワークを説明できる。
12	失語症の種類	・失語症の病巣と症状を説明できる。 ・失語症分類を説明できる。
13	高次脳機能障害 失行・失認・注意障害	・失行・失認・注意障害を説明できる。 ・高次脳機能障害の病巣を説明できる。 ・高次脳機能障害で用いる評価の方法や判定基準を説明できる。
14	疾患ごとの脳画像の見方と予後予測	・脳血管障害や頭部外傷における脳画像の所見を説明できる。 ・脳画像所見に関する文献を参考に予後予測ができる。
15	臨床推論	・脳血管障害の症例に対し、必要な評価項目を列挙できる。 ・脳血管障害の症例レポートを読み、評価結果の解釈を説明できる。 ・脳血管障害の症例レポートを読み、理学療法実施に関わる情報を整理できる。

成績評価方法					
	知識(認知領域)	技術(精神運動領域)	態度(情意領域)	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀(4):90点以上
小テスト				評価なし	優(3):80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良(2):70～79点
授業態度				評価なし	可(1):60～69点
発表・作品				評価なし	不可(0):60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	()内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、理学療法評価に携わってきた。	

科目名	理学療法評価法実習A					単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	PT 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	治療室	
授業概要	1年次から2年次前期までに学んだ各理学療法評価法についての知識定着の確認と整理を行い、3年次のOSCEに繋げていく。									
一般目標	各評価項目の知識の再検討と整理を行い、適切に各評価が行える。									
テキスト 参考書等	改訂第2版 神経診察クローズアップ 正しい病巣診断のコツ(メジカルビュー)、新・徒手筋力検査法 原著第10版(協同医学出版社) 図解 理学療法検査・測定ガイド(文光堂)									

到達目標		
知識(認知領域) ・授業で取り上げた理学療法評価について説明できる。		
技術(精神運動領域) ・授業で取り上げた理学療法評価について実施できる。 ・評価結果を解釈した内容について言語化し、示すことができる。		
態度(情意領域) ・授業に積極的に参加することができる。(周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する) ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	理学療法評価概論(友原)	評価の概論・医療面接を症例を想定し実践できる。
2	形態測定実習(友原)	形態測定を症例を想定し実践できる。
3	ROM実習(上肢)(友原)	上肢のROM測定を症例を想定し実践できる。
4	ROM実習(下肢)(友原)	下肢のROM測定を症例を想定し実践できる。
5	ROM実習(体幹・総括)(友原)	体幹のROM測定を症例を想定し実践できる。
6	知覚検査・反射検査実習(山本)	知覚検査・反射検査の意義・目的・方法について説明し、実施できる。
7	筋緊張・疼痛検査実習(山本)	筋緊張・疼痛検査の意義・目的・方法について説明し、実施できる。
8	脳画像読影①(川崎)	・脳画像所見から出現する可能性のある症状を列挙できる。 ・脳画像所見による症状の仮説について、検証すべき評価項目を列挙できる。 ・画像所見の解釈した内容について言語化し、示すことができる。
9	脳画像読影②(川崎)	・脳画像所見から出現する可能性のある症状を列挙できる。 ・脳画像所見による症状の仮説について、検証すべき評価項目を列挙できる。 ・画像所見の解釈した内容について言語化し、示すことができる。
10	片麻痺機能検査①(川崎)	・Brunnstrom Stageの意義・目的・方法について説明できる。 ・Brunnstrom Stageを実施できる。 ・評価結果を解釈した内容について言語化し、示すことができる。
11	片麻痺機能検査②(川崎)	・SIASの意義・目的・方法について説明できる。 ・SIASを実施できる。 ・評価結果を解釈した内容について言語化し、示すことができる。
12	バランス評価(平衡機能・バランス)①(川崎)	・バランス評価(平衡機能・バランス)の意義・目的・方法について説明できる。 ・バランス評価(平衡機能・バランス)を実施できる。 ・評価結果を解釈した内容について言語化し、示すことができる。
13	バランス評価(平衡機能・バランス)②(川崎)	・バランス評価(平衡機能・バランス)の意義・目的・方法について説明できる。 ・バランス評価(平衡機能・バランス)を実施できる。 ・評価結果を解釈した内容について言語化し、示すことができる。
14	徒手筋力検査①(川崎)	・徒手筋力検査の意義・目的・方法について説明できる。 ・状況に応じた徒手筋力検査を実施できる。 ・評価結果を解釈した内容について言語化し、示すことができる。
15	徒手筋力検査②(川崎)	・徒手筋力検査の意義・目的・方法について説明できる。 ・状況に応じた徒手筋力検査を実施できる。 ・評価結果を解釈した内容について言語化し、示すことができる。

成績評価方法					
	知識(認知領域)	技術(精神運動領域)	態度(情意領域)	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀(4):90点以上
小テスト				評価なし	優(3):80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良(2):70～79点
授業態度				評価なし	可(1):60～69点
発表・作品				評価なし	不可(0):60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	()内はGPA点数
担当教員	山本 悟、友原 望美、他		実務経験紹介	理学療法士として医療機関で理学療法評価の経験あり。(友原)	

科目名	日常生活活動B			単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室
授業概要	日常生活活動Aで学んだ用語の説明や評価方法、歩行補助具の調節方法などを基盤に、各種疾患における疾患の特異性やADL指導を学んでいく。また、臨床に多くみられるケースを中心に、ICFを用いた情報の整理や課題解決に向けた方法を検討し、臨床の問題解決思考を学修する。							
一般目標	・疾患別ADLについて適切な評価を実施し、実際の訓練・指導方法を身につける。 ・症例情報をICFを用いて整理し、課題解決方法を調査・検討できる。							
テキスト 参考書等	テキスト：Cross Link理学療法学テキスト 日常生活活動学（メジカルビュー） その他、必要な資料を適宜配布する。							

到達目標		
知識（認知領域）		
・各疾患の特異性を考慮したADL指導を説明できる。		
技術（精神運動領域）		
・各疾患の特異性を考慮したADL指導を実施できる。 ・ヒヤリハットの状況を分析し、改善策や予防策を立案できる。 ・ICFを用いて情報を整理できる。		
態度（情意領域）		
・授業に積極的に参加できる。		
回数	授業内容	授業目標
1	脳卒中片麻痺のADL①	・日常生活における評価の基本的な考え方を説明できる。 ・病期に合わせたADLの考え方を説明できる。 ・ADLに関わる運動機能、感覚、バランス機能、高次脳機能検査など、種々の身体機能を評価できる。
2	脳卒中片麻痺のADL②	・ADL介入の3つの展開を説明できる。 ・起居動作、身の回り動作等のADLに必要な安定性と安楽性を考慮した動作手順を実施できる。 ・状況に応じた代償動作や環境調整、福祉用具を検討できる。
3	脊髄損傷のADL①	・損傷レベルと残存機能を説明できる。 ・脊髄損傷における各レベルのADLの実施方法を説明できる。
4	脊髄損傷のADL②	・各損傷レベルに応じた起居移乗動作練習を指導できる。 ・各種移乗動作練習を指導できる。
5	変形性関節症のADL①	・変形性関節症の病態と症状の特徴を説明できる。 ・変形性関節症の評価について説明できる。
6	変形性関節症のADL②	・変形性関節症の術式および禁忌肢位について説明できる。 ・変形性関節症のADLの特徴について説明できる。 ・変形性関節症のADL動作練習を指導できる。
7	関節リウマチのADL	・関節リウマチの病態や症状、変形の特徴を説明できる。 ・関節リウマチの装具・自助具を説明できる。 ・関節リウマチのADL動作練習を指導できる。
8	神経筋疾患のADL	・PD,SCD,ALS,MDの疾患特性を考慮した疾患特異の評価尺度を説明できる。 ・PD,SCD,ALS,MDの疾患特性を考慮したADL動作練習を指導できる。
9	日常生活上のヒヤリハット	・日常生活活動上のヒヤリハットの状況を分析できる。 ・日常生活活動上のヒヤリハットの改善策や予防策を立案できる。
10	臨床的問題解決思考① （症例1：脳卒中片麻痺）	・ICFを用いて症例情報を整理できる。 ・臨床課題に対して解決策を調べることができる。 ・ADLの改善を目的に、医学的根拠のある理学療法プログラムを立案できる。
11	臨床的問題解決思考② （症例1：脳卒中片麻痺）	・ICFを用いて症例情報を整理できる。 ・臨床課題に対して解決策を調べることができる。 ・ADLの改善を目的に、医学的根拠のある理学療法プログラムを立案できる。
12	臨床的問題解決思考③ （症例1：脳卒中片麻痺）	・ICFを用いて症例情報を整理できる。 ・臨床課題に対して解決策を調べることができる。 ・ADLの改善を目的に、医学的根拠のある理学療法プログラムを立案できる。
13	臨床的問題解決思考④ （症例2：変形性関節症）	・ICFを用いて症例情報を整理できる。 ・臨床課題に対して解決策を調べることができる。 ・ADLの改善を目的に、医学的根拠のある理学療法プログラムを立案できる。
14	臨床的問題解決思考⑤ （症例2：変形性関節症）	・ICFを用いて症例情報を整理できる。 ・臨床課題に対して解決策を調べることができる。 ・ADLの改善を目的に、医学的根拠のある理学療法プログラムを立案できる。
15	学修到達確認 （筆記・演習）	・各種疾患における特徴やADL指導方法を説明できる。 ・課題提示された症例の情報をICFを用いて整理できる。 ・ADLの改善を目的に、医学的根拠のある理学療法プログラムを立案できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、ADLに関する評価や指導に携わってきた。	

科目名	日常生活活動実習A				単位数	1	時間数	30	
授業形態	実習	対象学生	P T2年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・治療室
授業概要	1年次に履修した日常生活活動Aの知識を再確認しながら、実践的な日常生活活動の支援や実技を習得する。実技は主に、移動動作能力についての介助方法を習得する。また福祉機器、自助具、住環境整備を設定できるようになる。								
一般目標	・トランスファーを始めとした各動作の介助を身につける。 ・日常生活活動の評価表を使用を習得する。 ・日常生活活動における福祉機器を使用を身につける。								
テキスト参考書等	適宜配布する。								

到達目標		
知識（認知領域）		
・身体介助の基本について説明できる。 ・日常生活活動の評価表の種類を列挙し、説明できる。		
技術（精神運動領域）		
・身体介助ができる。 ・B I、F I Mが採点できる。		
態度（情意領域）		
・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	日常生活活動（ADL）の評価について	日常生活活動（ADL）の評価（Barthel Index / FIM）について説明・実施できる。
2	日常生活活動（ADL）の範囲と身の回りの動作	日常生活活動（ADL）の範囲について説明し、身の回りの動作介助が実施できる。
3	日常生活活動（ADL）の分析	日常生活活動（ADL）の分析について説明・実施できる。
4	日常生活活動（ADL）における移動動作・歩行	日常生活活動（ADL）における移動動作・歩行について説明できる。
5	床上動作の介助	床上動作の介助が実施できる。
6	床上動作の介助	床上動作の介助が実施できる。
7	移乗動作・移乗の原則	移乗動作・移乗の原則について説明・実施できる。
8	移乗動作介助（Scooting）	移乗動作介助（Scooting）ができる。
9	移乗動作介助（Under Arm Transfer）	移乗動作介助（Under Arm Transfer）ができる。
10	移乗動作介助（Over Arm Transfer）	移乗動作介助（Over Arm Transfer）ができる。
11	移乗動作介助（Sliding Board Transfer）	移乗動作介助（Sliding Board Transfer）ができる。
12	移乗動作介助（Standing Pivot Transfer）	移乗動作介助（Standing Pivot Transfer）ができる。
13	移乗動作介助（複数人でのトランス	移乗動作介助（複数人でのトランスファー）ができる。
14	移乗動作介助（複数人でのトランス	移乗動作介助（複数人でのトランスファー）ができる。
15	移乗機器の操作	移乗機器の操作ができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験		○		100	秀（４）：９０点以上
小テスト				評価なし	優（３）：８０～８９点
宿題授業外レポート				評価なし	良（２）：７０～７９点
授業態度				評価なし	可（１）：６０～６９点
発表・作品				評価なし	不可（０）：６０点未満 未修得
演習	○	○		評価なし	（ ）内はGPA点数
出席			○	欠格条件	
担当教員	島本 祐嗣		実務経験紹介	理学療法士として11年の経験があり、訪問リハビリなど幅広くADLに関わった	

科目名	義肢装具学A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 2年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	402教室
授業概要	リハビリテーション医療における義肢装具の役割は重要である。本授業ではリハビリテーションの中で用いる装具の選択・取り扱いが的確に実施することについて学ぶ。また、国家試験を取り入れ、国家試験に対応できるようにしていく。								
一般目標	授業で取り上げた、上肢装具、下肢装具、体幹装具の基礎知識、取り扱いや装着・操作方法を説明することができ、国家試験問題に対応を身に付ける。								
テキスト 参考書等	シンプル理学療法学シリーズ 義肢装具学テキスト 改訂第3版（南江堂） 義肢装具チェックポイント（医学書院）								

到達目標		
知識（認知領域）		・上肢装具、下肢装具、体幹装具の基礎知識、取り扱いや装着・操作方法を説明する事ができる。
技術（精神運動領域）		・なし
態度（情意領域）		・授業に積極的に参加することができる。
回数	授業内容	授業目標
1	装具学総論	装具の概要について説明できる。
2	上肢装具①肩装具、肘装具	肩装具、肘装具の種類・取り扱いを説明できる。
3	上肢装具②対立装具、把持装具、手関節装具	対立装具、把持装具、手関節装具の種類・取り扱いを説明できる。
4	上肢装具③手指装具	手指装具の種類・取り扱いを説明できる。
5	その他の上肢装具	その他の上肢装具の種類・取り扱いを説明できる。
6	体幹装具①頸椎、胸椎装具	頸椎、胸椎装具の種類・取り扱いを説明できる。
7	体幹装具②腰椎、腰仙椎装具その他	腰椎、腰仙椎装具の種類・取り扱いを説明できる。
8	体幹装具③側弯装具、その他	側弯装具の種類・取り扱いを説明できる。
9	下肢装具①短下肢装具	短下肢装具の種類・取り扱いを説明できる。
10	下肢装具②長下肢装具	長下肢装具の種類・取り扱いを説明できる。
11	下肢装具③免荷装具	免荷装具の種類・取り扱いを説明できる。
12	下肢装具④骨折装具	骨折装具の種類・取り扱いを説明できる。
13	下肢装具⑤小児疾患に対する下肢装具	小児疾患に対する下肢装具の種類・取り扱いを説明できる。
14	下肢装具⑥靴型装具	靴型装具の種類・取り扱いを説明できる。
15	下肢装具⑦その他の下肢装具	その他の下肢装具の種類・取り扱いを説明できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト	○			評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	藤井 昭宏		実務経験紹介	理学療法士として10年間、急性期病院に勤務。義肢および装具のコーディネーターを担当。	

科目名	義肢装具学B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・木工室
授業概要	義肢装具は関節の固定や矯正・安静・保護、失われた機能の代償として用いられる。近年の義肢装具分野は人間工学や材料工学の発展に伴い著しく進歩している。この授業では義肢についての知識を修得するとともに、最近の知見やエビデンスに加え、症例紹介や疾患別の義肢装具処方について学習する。								
一般目標	・義肢についての知識を修得する。 ・症例を通じて疾患別の義肢装具処方の流れと方法について修得する。								
テキスト 参考書等	シンプル理学療法学シリーズ 義肢装具学テキスト （南江堂） 義肢装具チェックポイント（医学書院）								

到達目標		
知識（認知領域） ・義肢の基礎知識、取り扱いや装着・操作方法を説明する事ができる。		
技術（精神運動領域） ・義肢の取り扱い、装着、操作を適切に実施できる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	義肢学総論、切断について	義肢の概要および切断について説明できる。
2	切断とADL	切断患者のADLについて理解し、説明できる。
3	良肢位保持と測定	切断患者の良肢位について理解し説明できる。 切断患者の測定について理解し説明できる。
4	義足体験、義足の理解	体験用義足を使用し、その使用方法について理解できる。 スケッチを通して義足の細部まで観察し、その構造と役割を理解できる。
5	切断患者の生活	切断患者の話を受け、そのADLおよび社会とのつながりについて理解できる。
6	断端管理、弾性包帯法	切断肢の断端管理について理解し説明できる。
7	股離断・大腿切断と義足	股離断・大腿切断について理解し、股義足・大腿義足の種類・取り扱いを説明できる。
8	膝離断と義足、膝継手	膝関節離断について理解し説明できる。 膝継手の種類・取り扱いを説明できる。
9	下腿切断・サイム切断と義足、足継	下腿切断・サイム切断について理解し説明できる。 足継手の種類・取り扱いを説明できる。
10	ギブス包帯実技	ギブス包帯を実施できる。
11	スプリント作成実技	スプリントを作成できる。
12	大腿義足歩行	大腿義足について説明できる。
13	下腿義足歩行	下腿義足について説明できる。
14	切断のリハビリテーション、義足と	切断のリハビリテーション、義足とADL
15	義肢まとめ（国家試験問題）	国家試験過去問題の学習を通じて、義肢について理解を深め、説明できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト	○			評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート	○			評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品		○		評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	加藤 善範		実務経験紹介	理学療法業務の中で、義肢装具に関わる経験あり。	

科目名	物理療法A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	P T 2年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・治療室
授業概要	理学療法法の2本柱である物理療法について、物理刺激の原理から生体に及ぼす影響と、その対象となる症状や疾患について理解を深める。また、物理機器の取り扱いができるように機器を用いた授業を展開する。								
一般目標	・物理療法に必要な基礎知識について習得する。 ・物理エネルギーが生体に及ぼす影響について習得する。 ・物理療法の器械を安全な使用を習得する。								
テキスト 参考書等	シンプル理学療法学シリーズ 物理療法学テキスト（南江堂）								

到達目標		
知識（認知領域）		
・物理療法に必要な基礎知識について説明することができる。 ・物理エネルギーが生体に及ぼす影響を説明することができる。		
技術（精神運動領域）		
・物理療法の機器を安全に使用することができる。		
態度（情意領域）		
・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	物理療法の概要	物理療法の概要について説明できる。
2	物理療法の生理学的基礎	物理療法の生理学的基礎について説明できる。
3	物理療法の禁忌と適応	物理療法の禁忌と適応について説明できる。
4	温熱療法の概要	温熱療法の概要について説明できる。
5	ホットパック・パラフィン浴	ホットパック・パラフィン浴について説明できる
6	温熱療法実習	温熱療法（ホットパック・パラフィン浴）が実施できる。
7	エネルギー変換療法の概要	エネルギー変換療法の概要について説明できる。
8	極超短波・超短波療法	極超短波・超短波療法について説明できる。
9	超音波療法	超音波療法について説明できる。
10	エネルギー変換療法実習	エネルギー変換療法（極超短波・超音波）が実施できる。
11	寒冷療法の概要	寒冷療法の概要について説明できる。
12	伝導冷却法・対流冷却法・気化冷却法	伝導冷却法・対流冷却法・気化冷却法について説明できる。
13	寒冷療法実習	寒冷療法（アイスバック・アイスクリッカー）が実施できる。
14	グループワーク	割り当てられた物理療法機器の効果を検証する実験的介入ができる。
15	グループワーク発表	実験から得られた生体の変化についてまとめ、発表することができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	島本 祐嗣		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、物理療法に携わってきた。	

科目名	物理療法B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	P T 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・治療室
授業概要	理学療法法の2本柱である物理療法について、物理刺激の原理から生体に及ぼす影響と、その対象となる症状や疾患について理解を深める。また、物理機器の取り扱いができるように機器を用いた授業を展開する。								
一般目標	・物理療法に必要な基礎知識を習得する。 ・物理エネルギーが生体に及ぼす影響を理解する。 ・物理療法の機器を安全な使用を習得する。								
テキスト 参考書等	シンプル理学療法学シリーズ 物理療法学テキスト（南江堂）								

到達目標		
知識（認知領域）		
・物理療法に必要な基礎知識について説明することができる。 ・物理エネルギーが生体に及ぼす影響を説明することができる。		
技術（精神運動領域）		
・物理療法の機器を安全に使用することができる。		
態度（情意領域）		
・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	電気刺激療法の概要	電気刺激療法療法の概要について説明できる。
2	経皮的電気神経刺激（TENS）	経皮的電気神経刺激（TENS）について説明できる。
3	神経筋電気刺激（NMES）	神経筋電気刺激（NMES）について説明できる。
4	電気刺激療法実習	電気刺激療法が実施できる。
5	光線療法の概要	光線療法について説明できる。
6	レーザー療法・紫外線療法・赤外線療法	レーザー療法・紫外線療法・赤外線療法について説明できる。
7	光線療法実習	光線療法が実施できる。
8	力学危機を用いた治療	力学危機を用いた治療について説明できる。
9	牽引療法・CPM	牽引療法・CPMについて説明できる。
10	力学機器を用いた治療実習	力学機器を用いた治療が実施できる。
11	水治療法の概要	水治療法の概要について説明できる。
12	過流浴・気泡浴・プール療法	過流浴・気泡浴・プール療法について説明できる。
13	水治療法実習	水治療法過流浴・気泡浴・プール療法）が実施できる。
14	グループワーク	割り当てられた物理療法機器の効果を検証する実験的介入ができる。
15	グループワーク発表	実験から得られた生体の変化についてまとめ、発表することができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	島本 祐嗣		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、物理療法に携わってきた。	

科目名	運動療法概論A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 2年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	402教室
授業概要	運動療法の主な治療対象になる機能形態障害は、実に様々な疾患により引き起こされる。本授業ではその起因疾患により各障害に対する治療原則が異なることを理解し、予防、悪化防止のための方策として筋力増強練習・関節可動域練習を的確に実施することについて学習する。								
一般目標	運動療法を実施するために医学的根拠に基づいた適切な方法を修得する。								
テキスト 参考書等	基礎運動学（医歯薬出版） シンプル理学療法学シリーズ 運動療法学テキスト（南江堂）								

到達目標		
知識（認知領域） ・授業で取り上げた運動療法について説明できる。		
技術（精神運動領域） ・授業で取り上げた運動療法について実施できる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	運動療法の基礎	運動療法の基礎について理解し説明できる。
2	筋力増強練習①	筋収縮と筋力増強練習について理解し、説明できる。
3	筋力増強練習②	筋力増強練習の必要性について理解し説明できる。 筋力増強練習の方法について理解し実施できる。
4	筋力増強練習③	筋力増強練習の方法について理解し実施できる。（肩関節）
5	筋力増強練習④	筋力増強練習の方法について理解し実施できる。（肘関節・手関節）
6	筋力増強練習⑤	筋力増強練習の方法について理解し実施できる。（股関節）
7	筋力増強練習⑥	筋力増強練習の方法について理解し実施できる。（膝関節・足関節）
8	筋力増強練習⑦	筋力増強練習の方法について理解し実施できる。（6大関節まとめ）
9	関節可動域練習①	関節の動きについて理解し説明できる。
10	関節可動域練習②	関節可動域練習の必要性について理解し説明できる。 関節可動域練習の方法について理解し実施できる。
11	関節可動域練習③	関節可動域練習の方法について理解し実施できる。（肩関節）
12	関節可動域練習④	関節可動域練習の方法について理解し実施できる。（肘関節・手関節）
13	関節可動域練習⑤	関節可動域練習の方法について理解し実施できる。（股関節）
14	関節可動域練習⑥	関節可動域練習の方法について理解し実施できる。（膝関節・足関節）
15	関節可動域練習⑦	関節可動域練習の方法について理解し実施できる。（6大関節まとめ）

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト	○			評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート	○			評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品		○		評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	加藤 善範		実務経験紹介	理学療法士として5年間、整形外科関連医療施設に勤務。運動療法の実施経験あり。	

科目名	運動療法概論B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	402教室
授業概要	運動療法の主な治療対象になる機能形態障害は、実に様々な疾患により引き起こされる。本授業ではその起因疾患により各障害に対する治療原則が異なることを理解し、予防・悪化防止のための方策として様々な運動療法を的確に実施することについて説明する。								
一般目標	運動療法を実施するために必要な知識を修得し、医学的根拠に基づいて適切に実施できる。								
テキスト 参考書等	シンプル理学療法学シリーズ 運動療法学テキスト（南江堂）								

到達目標		
知識（認知領域） ・授業で取り上げた運動療法について説明できる。		
技術（精神運動領域） ・授業で取り上げた運動療法について実施できる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	運動と呼吸	運動による呼吸機能への影響について説明できる。
2	呼吸器疾患と治療	呼吸器疾患の一般的な治療、意義・目的・方法について説明し、実施できる。
3	呼吸訓練	呼吸訓練の意義・目的・方法について説明し、実施できる。
4	運動と循環 ティルトテーブル	運動と循環について理解し、説明できる。 ティルトテーブルの意義・目的・方法について説明し、実施できる。
5	循環器疾患の運動療法 レジスタンストレーニング	循環器疾患の運動療法について理解し、実施できる。 レジスタンストレーニングの意義・目的・方法について説明し、実施できる。
6	運動と代謝	運動と代謝について理解し、説明できる。
7	持久力訓練 自転車エルゴメーター、トレッドミル	持久力訓練の意義・目的・方法について説明し、実施できる。
8	運動と協調性 フレンケル体操	協調性運動の基本について説明できる。協調性訓練の意義・目的・方法について説明し、実施できる。
9	体幹機能障害（腰痛症）に対する体操① ウィリアムス体操	腰痛症について理解し、説明できる。 ウィリアムス体操の意義・目的・方法について説明し、実施できる。
10	体幹機能障害（側弯症と圧迫骨折）に対する体操② クラップ体操・ベラー体操	側弯症と圧迫骨折について理解し、説明できる。 クラップ体操とベラー体操の意義・目的・方法について説明し、実施できる。
11	末梢循環障害・肩関節障害に対する体操 バージャー体操・コッドマン体操	末梢循環障害・肩関節障害について説明できる。 バージャー体操・コッドマン体操の意義・目的・方法について説明し、実施できる。
12	運動療法まとめ①	授業で取り上げた運動療法について説明し、実施できる。
13	運動療法まとめ②	授業で取り上げた運動療法について説明し、実施できる。
14	運動療法まとめ③	授業で取り上げた運動療法について説明し、実施できる。
15	運動療法まとめ④	授業で取り上げた運動療法について説明し、実施できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト	○			評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート	○			評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品		○		評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	加藤 善範		実務経験紹介	理学療法業務の中で、運動療法の実施経験あり。	

科目名	骨関節障害理学療法学A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学年	PT 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・治療室
授業概要	運動療法は物理療法と並ぶ理学療法の主要な治療法であり、その知識・技術を習得することは理学療法士にとって必須である。この授業では、理学療法士が対象とする機会が多い運動器疾患を取り上げ、その運動療法について基本的知識・技術を学習する。								
一般目標	・主要な運動器疾患の運動療法に関する基本的知識を修得する。								
テキスト 参考書等	運動器の運動療法（羊土社） 随時、資料を配布する。								

到達目標		
知識（認知領域） ・主要な整形外科疾患の運動療法について、その目的や内容が説明できる。		
技術（精神運動領域） ・模擬患者（学生）を対象に基本的運動療法が適切に実施できる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	運動器運動療法の基礎	・運動器運動療法の基本概念が説明できる。
2	関節可動域運動の基礎	・関節可動域運動の基本概念が説明できる。
3	筋力運動の基礎	・筋力運動の基本概念が説明できる。
4	肩関節に対する運動療法	・肩関節疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
5	肘関節に対する運動療法	・肘関節疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
6	手関節・手に対する運動療法	・手関節・手疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
7	股関節に対する運動療法①	・股関節疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
8	股関節に対する運動療法②	・股関節疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
9	股関節に対する運動療法③	・股関節疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
10	膝関節に対する運動療法①	・膝関節疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
11	膝関節に対する運動療法②	・膝関節疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
12	足関節に対する運動療法	・足関節疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
13	体幹に対する運動療法①	・頸部疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
14	体幹に対する運動療法②	・腰部疾患に対する運動療法の概要について説明できる。
15	まとめ	・各身体各部位の運動器疾患に対する運動療法の概要についてまとめることができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80点以上
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70点以上
授業態度				評価なし	可（1）：60点以上
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	山本 悟		実務経験紹介	理学療法士として約30年間、医療施設に勤務し整形外科疾患患者の運動療法を行う。	

科目名	神経障害理学療法学A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 2年	学期	前期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・治療室
授業概要	神経疾患は理学療法的主要な対象疾患である。中枢神経障害では多種多彩な症状・徴候を認めることが多いため、私たち理学療法士は、失われた機能をどのように再獲得するか、あるいはどのようにしたら残存機能を高めたり、維持したりすることが出来るのか、そうした判断が的確にできなくてはならない。そのため、脳血管障害をはじめとする中枢神経障害の運動療法を学習する。								
一般目標	脳血管障害をはじめとした中枢神経障害の理学療法の基本的な知識を身につける。								
テキスト 参考書等	神経障害理学療法学（羊土社） 随時、資料を配布する。								

到達目標		
知識（認知領域）		・脳血管
障害をはじめとした中枢神経障害の運動療法について理解し説明できる。		
技術（精神運動領域）		・なし
態度（情意領域）		・授業に積極的に参加することができる。
回数	授業内容	授業目標
1	神経障害との理学療法	主要な中枢神経疾患の病態について説明することができる。
2	脳卒中急性期の運動療法①	脳卒中片麻痺（急性期）の運動療法について説明することができる。
3	脳卒中急性期の運動療法②	脳卒中片麻痺（急性期）の運動療法について説明することができる。
4	脳卒中回復期の運動療法①	脳卒中片麻痺（回復期）の運動療法について説明することができる。
5	脳卒中回復期の運動療法②	脳卒中片麻痺（回復期）の運動療法について説明することができる。
6	脳卒中回復期の運動療法③	脳卒中片麻痺（回復期）の運動療法について説明することができる。
7	脳卒中維持期の運動療法①	脳卒中片麻痺（維持期）の運動療法について説明することができる。
8	脳卒中維持期の運動療法②	脳卒中片麻痺（維持期）の運動療法について説明することができる。
9	パーキンソン病の運動療法①	・パーキンソン病の運動療法について説明することができる。
10	パーキンソン病の運動療法②	・パーキンソン病の運動療法について説明することができる。
11	脊髄小脳変性症の運動療法①	・脊髄小脳変性症（運動失調）の運動療法について説明することができる。
12	脊髄小脳変性症の運動療法②	・脊髄小脳変性症（運動失調）の運動療法について説明することができる。
13	その他中枢神経系疾患の病態	・筋委縮性側索硬化症の運動療法について説明することができる。
14	その他中枢神経系疾患の運動療法	・多発性硬化症の運動療法について説明することができる。
15	まとめ	・主要な中枢神経疾患の病態と運動療法の概要について説明することができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	山本 悟		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、神経障害の理学療法に携わる経験あり。	

科目名	神経障害理学療法学B				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・治療室
授業概要	各種神経障害に関する一般的な評価・治療法について知識を整理し、症例検討を通して疾患への理解と理学療法の関わり方を深める。								
一般目標	・ 各種神経障害に関する一般的な治療法を説明できる。 ・ 部位別、疾患別に診断・評価・治療を説明できる。 ・ 症例検討では、適切な検査・測定を選択し、模倣・実施ができる。								
テキスト 参考書等	『マッスルエナジーテクニック』ー全身の筋肉に適応できるホールドリラクソスアプローチ ガイアックス社 （弓岡分） 脳卒中理学療法の理論と技術 メジカルビュー社 （穴戸分） その他、適宜資料を配布します。(藤井分)								

到達目標		
知識（認知領域）		
・授業で取り上げた疾患および治療法について説明できる。 ・脳卒中の基礎を理解できる。		
技術（精神運動領域）		
・授業で取り上げた、動作分析、運動療法について説明できる。		
態度（情意領域）		
・積極的に授業に参加することができる。		
回数	授業内容	授業目標
1	Bobathアプローチ①（弓岡）	Bobathアプローチについて説明できる。
2	Bobathアプローチ②（弓岡）	動作分析と触診に基づいた評価と治療手技が説明できる。
3	Bobathアプローチ③（弓岡）	動作分析と触診に基づいた評価と治療手技が説明できる。
4	Bobathアプローチ④（弓岡）	動作分析と触診に基づいた評価と治療手技が説明できる。
5	Bobathアプローチ⑤（弓岡）	動作分析と触診に基づいた評価と治療手技が説明できる。
6	Bobathアプローチ⑥（弓岡）	動作分析と触診に基づいた評価と治療手技が説明できる。
7	脊髄損傷①（藤井）	脊髄損傷の概要について説明することができる。
8	脊髄損傷②（藤井）	脊髄損傷の障害像について説明することができる。
9	脊髄損傷③（藤井）	脊髄損傷の理学療法評価について説明することができる。
10	脊髄損傷④（藤井）	脊髄損傷の理学療法アプローチについて説明することができる。
11	特殊神経疾患①（藤井）	特殊疾患について説明することができる。
12	特殊神経疾患②（藤井）	特殊疾患を行う理学療法について、意義・目的・方法を説明することができる。
13	パーキンソン病①（藤井）	パーキンソン病について説明することができる。
14	パーキンソン病②（藤井）	パーキンソン病を行う理学療法について、意義・目的・方法を説明することができる。
15	症例検討（藤井）	評価や治療、ゴール設定について、情報を整理・検討を行い、プログラムを立案することができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○	○		100	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品				評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	弓岡 光徳、他		実務経験紹介	理学療法士として約20年間、神経系関連医療施設に勤務(弓岡)	

科目名	内部障害理学療法学A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・治療室
授業概要	代表的な循環器疾患の病態、症状、運動機能評価、理学療法プログラムについて学習する。不整脈の種類や心電図を用いた不整脈の判読手順を解説し、リスク管理について学習する。また、理学療法をすすめる際に必要となる心臓リハビリテーションについて解説する。								
一般目標	1. 循環器疾患の病態について習得する。 2. 循環器疾患患者に対する評価や不整脈、リスク管理について習得する。 3. 心臓リハビリテーション(特に運動療法)について習得する。								
テキスト 参考書等	呼吸・心臓リハビリテーション (羊土社)								

到達目標		
知識(認知領域) 授業で取り上げた循環器疾患および心臓リハビリテーション(特に運動療法)について説明できる		
技術(精神運動領域) バイタルチェック・視診・問診・触診・聴診が目的を持って行うことができる レジスタンストレーニング・有酸素運動などの負荷が適切に行うことができる		
態度(情意領域) 理学療法士として患者さんと真正面から向き合い、一生懸命理学療法を実践していくという、意思表示ができる		
回数	授業内容	授業目標
1	循環器疾患総論	・心臓リハビリテーションの定義・目的を説明できる ・心臓リハビリテーションの構成要素を説明できる ・心臓リハビリテーションの効果を説明できる
2	循環器系の解剖と機能	循環器(特に心臓)の構造と機能について説明できる
3	循環器系の症候と検査	循環器系の症候(自覚症状や身体所見など)、検査(心電図など)を説明できる
4	心臓リハビリテーション総論	・心臓リハビリテーションの有効性を説明できる ・心臓リハビリテーションの適応と禁忌が説明できる ・心臓リハビリテーションの運動療法の強度・頻度・種類について説明できる
5	虚血性心疾患のリハビリテーション	虚血性心疾患の病態、理学療法について説明できる
6	心不全のリハビリテーション	心不全の病態、理学療法について説明できる
7	開心術後のリハビリテーション	・開心術の種類について説明できる ・開心術後の理学療法について説明できる
8	患者教育について(食事指導など)	食事指導を中心とした生活指導について理解し説明できる
9	実技(バイタルチェック)	血圧、脈拍、脈圧、SpO2を測定することの意味を理解し、実践できる
10	実技(問診、視診)	目的を持った問診・視診が実践できる
11	実技(触診、聴診)	末梢循環、心尖拍動の触診、心音の聴診ができる
12	実技(レジスタンストレーニング)	適切な負荷・リスク管理を考えたレジスタンストレーニングが実践できる
13	実技(有酸素運動、運動負荷試験)	ボルグスケールやカルボーネンの式を使用し、エルゴメーターやトレッドミルでの運動負荷が実践できる
14	グループワーク(ホームエクササイズの作成、患者指導など)	症例に合わせたホームエクササイズの実施・患者指導ができる
15	試験対策	循環器の理学療法について整理することができる

成績評価方法					
	知識(認知領域)	技術(精神運動領域)	態度(情意領域)	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀(4):90点以上
小テスト				評価なし	優(3):80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良(2):70～79点
授業態度				評価なし	可(1):60～69点
発表・作品				評価なし	不可(0):60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	()内はGPA点数
担当教員	金井 和明		実務経験紹介	理学療法士として約12年間、急性期病院に勤務(心臓リハビリテーション指導士を取得して約7年)	

科目名	スポーツ理学療法学A				単位数	2	時間数	30	
授業形態	講義	対象学生	PT 2年	学期	後期	教員実務経験	有	使用教室	402教室・治療室
授業概要	スポーツ分野における理学療法の対象・内容を知り、理学療法士の領域について知る。多くの競技種目における競技動作と障害発生の原因となる動作を理解し、競技者に対する治療アプローチの知識を深める。								
一般目標	・スポーツ分野における理学療法の対象を理解し知識を修得する。 ・スポーツ競技に起こりうるスポーツ障害に関する知識を修得する。 ・スポーツ理学療法の内容を理解し知識を習得する。								
テキスト参考書等	改訂第2版 スポーツ理学療法学 動作に基づく外傷・障害の理解と評価・治療の進め方(株式会社 メジカルビュー社)								

到達目標		
知識（認知領域） ・スポーツ分野の理学療法の領域および、競技者に対する治療アプローチについて説明できる。		
技術（精神運動領域） ・スポーツにおける各障害に対する応急処置が模倣ができる。		
態度（情意領域） ・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	導入：スポーツ理学療法とは？	スポーツ理学療法の領域・おおまかな内容について理解し説明することができる。
2	スポーツ理学療法学について理解を深める（自己の経験を振り返り経験を医学的に理解する）①	自己のスポーツでの障害経験とそれに対するアプローチを医学的に理解し説明できる。
3	スポーツ理学療法学について理解を深める（自己の経験を振り返り経験を医学的に理解する）②	他者のスポーツでの障害および回復過程のでのアプローチを聴取することにより、様々なスポーツ分野について理解できる。
4	スポーツ現場での初期評価・応急処置	スポーツ現場での初期評価と応急処置の方法について理解し模倣できる。
5	上肢のスポーツ理学療法①（肩脱臼）	肩関節のスポーツ障害・アプローチについて理解し、説明できる。
6	上肢のスポーツ理学療法②（野球肘）	肘関節のスポーツ障害・アプローチについて理解し、説明できる。
7	上肢のスポーツ理学療法③（テニス肘）	肘関節のスポーツ障害・アプローチについて理解し、説明できる。
8	上肢のスポーツ理学療法④（手部）	手部のスポーツ障害・アプローチについて理解し、説明できる。
9	体幹のスポーツ理学療法⑤（頸椎）	体幹部のスポーツ障害・アプローチについて理解し、説明できる。
10	まとめ：上肢・体幹スポーツ理学療法について	これまで学習した障害・理学療法アプローチについて自分なりにまとめ、その内容を理解し説明できる。
11	下肢のスポーツ理学療法①（肉離れ）	下肢のスポーツ障害・アプローチについて理解し、説明できる。
12	下肢のスポーツ理学療法②（アキレス腱）	下腿のスポーツ障害・アプローチについて理解し、説明できる。
13	下肢のスポーツ理学療法③（足関節）	足部のスポーツ障害・アプローチについて理解し、説明できる。
14	下肢のスポーツ理学療法④（ACL損傷）	膝関節部のスポーツ障害・アプローチについて理解し、説明できる。
15	まとめ：これまでのスポーツ理学療法について	これまで学習した障害・理学療法アプローチについて自分なりにまとめ、その内容を理解し説明できる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（4）：90点以上
小テスト	○			評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート	○			評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品		○		評価なし	不可（0）：60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	加藤 善範		実務経験紹介	理学療法業務の中で、スポーツリハビリに携わる経験あり。	

科目名	臨床実習Ⅰ				単位数	1	時間数	45	
授業形態	実習	対象学生	P T 2年	学期	前期・後期	教員実務経験	有	使用教室	なし
授業概要	臨床実習は、養成課程の中で修得した知識や技能を手掛かりとし、養成校では経験できない実践環境で、より一層の理解を深めるための教育機会である。2年次は見学実習であり、早期体験の側面を持ちつつ、対象者や施設・医療スタッフに対して適切な態度で接すること、診療チームの一員としての理学療法士の役割について学ぶことが望まれる。								
一般目標	・対象者を尊重し、共感的態度をもって、より良い・善い人間関係を構築できる。（理学療法の対象者との関係性構築） ・職場における理学療法士の役割と責任について理解し、その一員として自覚のある言動をとることができる。（チーム内での多職種との関係性および理学療法士の役割）								
テキスト参考書等	2年次臨床実習Ⅰガイドブック、臨床実習教育の手引き 第6版（日本理学療法士協会、 https://www.jpapnt.or.jp/activity/books/education_01/ ）								

到達目標		
知識（認知領域） ・1年次・2年次前期に履修した専門基礎科目・専門科目の知識について、想起（記憶している）～解釈（理解している）レベルで説明できる。 ・臨床実習で経験した内容について、資料や文献で調べたことをまとめた上で説明できる。		
技術（精神運動領域） ・臨床現場で求められる常識的態度や、責任のある行動をとることができる。 ・対象者（患者様・利用者様）とコミュニケーションをとることができる。 ・臨床実習指導者と良好な人間関係を築くことができる。 ・理学療法の役割や流れを理解し、自覚のある言動をとることができる。 ・経験		
態度（情意領域） ・挨拶・服装・身だしなみに留意して臨むことができる。 ・報告・連絡・相談を適宜行うことができる。 ・守秘義務の徹底することができる。 ・個人情報取扱いに細心の注意を払える。		
時間数	授業内容	授業目標
40時間	見学実習 実習前の取り組み ①ワクチン接種状況確認 ②実習前相談 ③感染対策 ④学習到達度確認 ⑤実習関連書類の作成 ・実習生プロフィール ・総括的評価およびコメント ・車両持込許可願（該当者） ・部外宿舎人居誓約書（該当者） ・食事申込書（該当者） ・個人情報保護に関する誓約書 ・出席簿 実習中の課題 ①臨床体験・診療参加 ②臨床実習チェックリスト ③臨床実習ポートフォリオ ・ディリーノート ・臨床経験気づきリスト ・文献収集 ・勉強会や研修会資料 実習後の取り組み ①実習関連書類の提出 ②実習後指導 ③凝縮ポートフォリオ作成 ④口頭試問	・対象者を尊重し、共感的態度をもって、より良い・善い人間関係を構築できる。 ① 清潔で適切な身だしなみ、ことば遣い、礼儀正しい態度で対象者に接することができる ② 共感的態度をもって、より良い・善い人間関係を構築することができる ③ 周囲における自己の存在を意識した言動を行うことができる ④ 自らが置かれた立場で、必要とされている要件を認識し、他者や指導者の助言などに対して適切に応答することができる ⑤ 対象者、家族のニーズ・要望などに対し、自身の感情を制御して接することができる ⑥ 対象者、家族にとって、相談しやすい雰囲気作りを心がけることができる ・職場における理学療法士の役割と責任について理解し、その一員として自覚のある言動をとることができる。 ① 医療職としての心得や職場内におけるルールを守ることができる ② 部門におけるルールを理解し、診療プロセス（処方の確認、計画書、効果判定、カルテ記録、算定手順など）を理解した言動をとることができる ③ 臨床実習指導者と十分なコミュニケーションを保って良好な関係を維持することができる ④ 積極的に理学療法スタッフや多職種と関わり、良好な関係を構築することができる ⑤ インシデント・アクシデントが生じた際には実習施設の手順に従って対応することができる ⑥ 守秘義務を果たし、プライバシーを守ることができる ⑦ 臨床実習施設における多職種連携の展開について見学することができる ・理学療法の流れを理解するとともに、臨床内容の意義を理解して説明をすることができる。 ① 検査項目・情報収集項目の抽出・取捨選択の理由について質問したり調べたりすることができる ② 検査結果の関連性について質問したり調べたりすることができる ③ 対象者が抱える課題を抽出する過程を見学し、その抽出理由について質問したり調べたりすることができる ④ 対象者の治療目標を設定について見学し、その設定根拠について質問したり調べたりすることができる ⑤ 理学療法プログラムを見学し、質問したり調べたりすることができる ⑥ 理学療法の即時効果を確認し、その内容について質問したり調べたりすることができる ⑦ 実施内容を診療記録に記載することが見学できる ⑧ カンファレンスでの症例提示内容について見学し、質問したり調べたりすることができる ・指導者の直接監視下で学生により実施されるべき項目（水準Ⅰ）において、次の項目1）～3）を実践することができる 1)リスク管理について ① スタンダードプリコーション（標準予防策）が実施できる ② バイタルサインの計測を見学し、可能ならば実施することができる ③ 意識レベルの評価を見学し、可能ならば実施することができる ④ 各種モニターの使用について見学できる 2)理学療法評価について ① 情報収集（診療記録、画像所見、部門内、他部門を含む）を見学し、質問したり調べたりすることができる ② フィジカルアセスメント（問診・視診・聴診・触診）を見学し、質問したり調べたりすることができる ③ 基本的な検査測定を見学し、質問したり調べたりすることができる ・形態計測・感覚検査・反射検査・筋緊張検査・関節可動域計測・筋力検査・運動耐容能 ④ 姿勢観察を見学し、質問したり調べたりすることができる ⑤ 動作観察を見学し、質問したり調べたりすることができる ⑥ 疼痛の評価を見学し、質問したり調べたりすることができる ⑦ 日常生活活動評価（手段的日常生活活動を含む）を見学し、質問したり調べたりすることができる ⑧ 運動器疾患に関する個別検査を見学し、質問したり調べたりすることができる ⑨ 中枢神経疾患に関する個別検査を見学し、質問したり調べたりすることができる ⑩ 内部障害に関する個別検査を見学し、質問したり調べたりすることができる ⑪ 各種発達評価を見学し、質問したり調べたりすることができる 3)理学療法治療技術について

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験				評価なし	秀（4）：90点以上
小テスト				評価なし	優（3）：80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良（2）：70～79点
授業態度				評価なし	可（1）：60～69点
発表・作品	○ （凝縮ポートフォリオ・口頭			100	不可（0）：60点未満 未修得
演習				評価なし	
出席			○	欠格条件	（ ）内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史		実務経験紹介	理学療法士として医療機関に従事し、臨床実習業務に携わってきた。	

科目名	臨床実習セミナーⅠ			単位数	1	時間数	30	
授業形態	演習	対象学生	P T 2年	学期	前期・後期	教員実務経験	有	使用教室
授業概要	臨床実習は、養成校で修得した知識や技能を手掛かりに、「養成施設では経験できない実践環境で、より一層の理解を深めるための教育機会」である。そのため、 教科書の内容を”見たことがある”の段階から”理解している”に発展させた上で臨む必要がある。したがって、							
一般目標	・これまでに修得した専門基礎・専門分野の知識を国家試験水準で身につける。 ・自己学習習慣を身に着ける。							
テキスト 参考書等	基礎固め ヒント式トレーニング 改訂第2版 基礎医学編（南江堂） 生体のしくみ標準テキスト第3版 新しい解剖整理（医学映像教育センター）、Visualearn（医学映像教育センター）							

到達目標		
知識（認知領域）		
・これまでに修得した専門基礎・専門分野の知識について説明できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、各選択肢の正解・不正解の理由を説明できる。		
技術（精神運動領域）		
・KJ法やブレインストーミングなどの手法を用い、周辺知識を関連付けて情報を整理できる。 ・学習到達度を把握し、無理のない自己学習スケジュールを立てることができる。		
態度（情意領域）		
・授業に積極的に参加することができる。（周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する） ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	専門基礎・専門分野における知識の整理① 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
2	専門基礎・専門分野における知識の整理② 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
3	専門基礎・専門分野における知識の整理③ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
4	専門基礎・専門分野における知識の整理④ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
5	専門基礎・専門分野における知識の整理⑤ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
6	専門基礎・専門分野における知識の整理⑥ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
7	専門基礎・専門分野における知識の整理⑦ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
8	専門基礎・専門分野における知識の整理⑧ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
9	専門基礎・専門分野における知識の整理⑨ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
10	専門基礎・専門分野における知識の整理⑩ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
11	専門基礎・専門分野における知識の整理⑪ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
12	専門基礎・専門分野における知識の整理⑫ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
13	専門基礎・専門分野における知識の整理⑬ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
14	専門基礎・専門分野における知識の整理⑭ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。
15	専門基礎・専門分野における知識の整理⑮ 学習到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学習スケジュールを立てることができる。

成績評価方法					
	知識（認知領域）	技術（精神運動領域）	態度（情意領域）	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀（４）：９０点以上
小テスト				評価なし	優（３）：８０～８９点
宿題授業外レポート				評価なし	良（２）：７０～７９点
授業態度				評価なし	可（１）：６０～６９点
発表・作品				評価なし	不可（０）：６０点未満 未修得
演習		○		評価なし	（ ）内はG P A点数
出席			○	欠格条件	
担当教員	川崎 裕史		実務経験紹介：理学療法士として病院勤務の経験があり、実習担当業務に携わってきた。（川崎）		

科目名	臨床実習セミナーⅠ				単位数	1	時間数	30	
授業形態	演習	対象学生	PT 2年	学期	前期・後期	教員実務経験	有	使用教室	402教室
授業概要	臨床実習は、養成校で修得した知識や技能を手掛かりに、「養成施設では経験できない実践環境で、より一層の理解を深めるための教育機会」である。そのため、教科書の内容を”見たことがある”の段階から”理解している”に発展させた上で臨む必要がある。したがって、これまでに学修した知識の学修到達度を確認した上で、国家試験水準の知識定着を図る。授業は前期8コマ、後期7コマで進行し、各期末においてCBTを行う。CBTは事前に提示している学修範囲の正答率が90%以上となるまで行う。								
一般目標	・これまでに修得した専門基礎・専門分野の知識を国家試験水準で身につける。 ・自己学習習慣を身に付ける。								
テキスト 参考書等	基礎固め ヒント式トレーニング 改訂第2版 基礎医学偏(南江堂) 生体のしくみ標準テキスト第3版 新しい解剖整理(医学映像教育センター)、Visualearn(医学映像教育センター)								

到達目標		
知識(認知領域)		
・これまでに修得した専門基礎・専門分野の知識について説明できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、各選択肢の正解・不正解の理由を説明できる。		
技術(精神運動領域)		
・KJ法やブレインストーミングなどの手法を用い、周辺知識を関連付けて情報を整理できる。 ・学修到達度を把握し、無理のない自己学修スケジュールを立てることができる。		
態度(情意領域)		
・授業に積極的に参加することができる。(周囲と協力する、周囲に配慮する、周囲と討議する) ・授業に出席する。		
回数	授業内容	授業目標
1	専門基礎・専門分野における知識の整理 ① 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
2	専門基礎・専門分野における知識の整理 ② 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
3	専門基礎・専門分野における知識の整理 ③ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
4	専門基礎・専門分野における知識の整理 ④ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
5	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑤ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
6	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑥ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
7	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑦ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
8	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑧ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
9	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑨ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
10	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑩ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
11	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑪ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
12	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑫ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
13	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑬ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
14	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑭ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。
15	専門基礎・専門分野における知識の整理 ⑮ 学修到達度確認	・専門基礎・専門分野の知識を、周辺知識と関連付けて整理できる。 ・専門基礎・専門分野の国家試験水準の多肢選択問題において、正解・不正解の理由を説明できる。 ・学習到達度の確認により、知識の不足分を補填する自己学修スケジュールを立てることができる。

成績評価方法					
	知識(認知領域)	技術(精神運動領域)	態度(情意領域)	評価割合	成績評価基準
定期試験	○			100	秀(4):90点以上
小テスト				評価なし	優(3):80～89点
宿題授業外レポート				評価なし	良(2):70～79点
授業態度				評価なし	可(1):60～69点
発表・作品				評価なし	不可(0):60点未満 未修得
演習		○		評価なし	
出席			○	欠格条件	()内はGPA点数
担当教員	川崎 裕史		実務経験紹介	理学療法士として病院勤務の経験があり、実習担当業務に携わってきた。(川崎)	